

2026年度 八戸学院大学

地域経営学科・人間健康学科・看護学科

一般選抜Ⅰ期

国語

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
2. 筆記用具は黒色の鉛筆またはシャープペンシルを使用すること。
3. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁に気付いたときは、手を挙げて監督者に知らせること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよい。
5. 問題冊子は持ち帰ってよい。

【I】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長谷川等伯の「松林図屏風」は明らかに二つの絵で①コウセイ^{注1}されています。それぞれを切り離して二つの絵として額にしたっていいのです。でも二つの絵を並べることによって、大きなもう一つの絵になるという構造は見事です。これこそ絵画における「間」にほかなりません。この「間」こそ、絵師が描きたかったものなのです。物を描くことを目指しているのではなく、それによって生まれる「間」を描こうとしていたのです。

この考えはものづくりにも潜んでいます。

日本の絵画も建築も、そこに描かれ、造られたもの自体ではなく、それによって生まれる、描かれていない余白や、「間」という空間にこそ目的があるのです。この余白や「間」は、つくる側が準備した、受け手が参加する空間です。受け手とは、小説では読者、絵画では②カンシヨウ者、建築では生活者なのですが、つくる側がすべてを描ききらず、受け手が参加できるように残しておくのです。

そもそもコミュニケーションとは非連続なものなのですが、どんなに理解を望んでも、描き手、つくり手が語ろうとしたことをA。受け手は、自分の考えでそれを読み取るものだからです。

この日本の、「余白」や「間」は、はじめから受け手が参加しやすいように準備された仕掛けだともいえます。コミュニケーションの非連続という現代的テーマが、この「余白」や「間」という形で1積極的に仕組みとなっていたのです。

「間」が何から③ユライするのかわかるとは思いますが、一つにはその根源に自己というものの意識があるのではないかと思います。西洋には、自己と他者をB「自我」というものがあって、人と社会を理解する大切な④ガイネンになっているように思います。しかし、日本人はその逆に、自己と他者との間にある種の融合感覚を持っている。ネイティブアメリカンの古老が「わしらは、昔は一つだったから、あいつのこともこの土のことも全部、分かっている」といい、他人の苦しみがそのまま分かるというのと同じように、日本人も深い信頼関係でつながれています。

あの人と僕の間、の信頼関係が、あの人と僕のあいだの「間」の感覚を育てているのです。「間」の感覚は、このような同類に対する気遣いが生みだしたものだから、自我を優先する西洋の文化からは理解が難しいのではないかと思うのです。

西洋と日本のこの違いは、それぞれの都市の歴史と関係しています。

西洋では都市間戦争に対応するために、⑤ボウギョしやすい都市を建設しました。城壁の長さを短くするために、建物を集合させて、小さく密集した都市が生まれました。密集した人々が平和に生活するために、法律や作法が必要になり、物事を相談したり、決定したり、約束に反した時の処刑場として使うために広場をもうける必要が生まれました。人々には2ややもすれば侵されてしまいがちな自己を守る意識が育成され、それが自我を発達させたのでしょう。守らなければ侵される、そのことが強い自我意識を生んだのです。

それに対して日本では、西洋のように3閉鎖的で密集した都市に住むことがなく、そのための公共の感覚をことさら育てる必要もなく、共に生きるためのマナーや広場を必要とすることもなかったのです。そこではCは育たないのです。自分を他者と区別する必要もなく、人々は初めから自然とも他人とも一つであるという原始的な感覚をそのまま持ち続けることができたのです。

融合とは、別々な単位が溶けるように一つになることです。日本における、人と人、人と自然との関係は、融合というより、「初めから一つであったものが分離されてしまって、そのために元に戻ろうとする引きあう力が内在している」といべきです。愛情を感じたり、気になる相手との関係とは、人と人が垣根を越えて融合する感覚というより、「Dが元に戻ろうとする感覚」だと思っています。気配や気遣いは一つだったことの余韻であり、残像のようなものということです。こう説明すると「間」の持つ力が見えてくると思います。「間」は二人の間の、二つの物の間の引きあう力学的な関係なのです。

(黒川雅之「八つの日本の美意識」より)

注1 はせがわとうはく長谷川等伯||安土桃山時代から江戸時代に活躍した絵師。

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二

A

に入るものとして最も適当なものを、次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。

ア そのままには受け止めてもらえません

イ そのまま受け止めようと努力します

ウ 批判的な目で見えてしまいます

問三

傍線部1「積極的」、傍線部3「閉鎖的」の対義語をそれぞれ答えなさい。

問四

B

に入るものとして最も適当なものを、次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。

ア 平等なものとなす

イ 社会的協力関係にある一員と考える

ウ はっきり分ける

問五 傍線部2「ややもすれば」の意味として最も適当なものを、次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 時間が経過すれば
- イ しっかりとした知識を持っていなければ
- ウ どうかすると

問六 Cに入る適切な語を、文章中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問七 Dに入るものとして最も適当なものを、次のア～ウの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 初めは一つであったもの
- イ 別々に存在しているそれぞれの単位
- ウ 日本と西洋との異なる考え方

問八 「マナー」とあるが、最近報じられることが多い外国人観光客の「マナー」について、あなたの考えを百字以内で書きなさい。

【Ⅱ】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

三学期の始まる数日前から、ヒコベエは学級委員選挙について考えていた。クラスを平定したのだから、今度こそ選ばれる①カクシンがあった。だが、一つだけどうしても解決のつかない問題があった。三学期の始業式を明日に②ヒカえた日曜日、朝食後に牛乳瓶の最後の三分の一を飲みながら、今日こそ親に聞いてみようと思った。その頃ヒコベエの家では、子供たちの栄養③ホキユウのため毎日、保証牛乳というメーカーの牛乳を一本(百八十ミリリットル)だけとっていた。飲む順番はジャンケンで決められた。少し前までは牛乳の底面から表面までの高さを大体三等分し、妹のサッコに上部三分の一を飲ましていたのだが、この頃までにはサッコも、上部三分の一がくびれている分だけ量が少ないことに気付いたため、三人でジャンケンということになっていた。ヒコベエは最後の三分の一を最後の一滴まで飲み干してから、懸案の問題を切り出した。

「明日、学級委員の選挙があるんだけど、自分で自分の名を書いていいのかな」

父と母はヒコベエの顔を見ると、ほとんど一緒に、

「もちろんいいよ」

と言った。お兄ちゃんが、

「何だヒコベエ、あんなものになりたいのか」

と軽蔑するように言った。ヒコベエは口を尖らせて言った。

「だって一度もなかったことないんだもん」

「俺なんてちゃんと一学期に学級委員をやったよ。1やりたくなかったのに選ばれちゃったから仕方なくやっただけさ。あんなもんやってると、勉強時間もとれなくなるよ」

母が助け船を出した。

「お前は一カ月後に中学入試をヒカえているからそうだろうけど、ヒコベエは違うよ。一度やると色々勉強になっていいと思うけどね、お母さん」

ヒコベエが言った。

「本当はねえ、2 困っているのはねえ、僕が自分の名を書くと、④ カイヒョウの結果、クラス全員五十名が僕に投票したことになりそうなんだよ。僕が自分の名を書いたことがバレちゃうということなんだよ」

ヒコベエは胸の中では、学級委員になりたいという⑤ キョウレツな欲望と、その気持ちを友達には絶対に知られたくないという羞恥が、統御できないほどに葛藤していたのである。母が不思議そうに言った。

「バレてどこが悪いのよ。なりたければ自分の名を書くの、当たり前じゃない。自分の名を書いちゃあいけない選挙なんて、世界中どこにもありやしないわよ」

父が口を開いた。

「本当に五十票満票になりそうなのか」

「多分なると思う」

「それなら誰かの名を書いておけば。四十九票でも当選するからな。自分の名を書くのはちよつと、というヒコベエの気持ちはわかるよ」

「お父さんまでそんな馬鹿なこと言うの。男っていうのは本当に見栄っぱりなんだから」

母が呆れたように首をふった。いつも通り、3 名より実をとる母と、実より名をとる父の意見が分かれたのであった。ヒコベエは内心、父に従い自分の名は書くまいと決めた。

翌日の投票では予測通り、ヒコベエが四十九票の得票で選ばれた。4 この時ほど安堵したことはなかった。帰宅するや、ヒコベエは意気揚々と母に言った。

「学級委員長に選ばれたよ。やっぱ四十九票だったよ。お母さんの言うことを聞いていたら大恥をかく所だったよ」

母はうれしそうに微笑んでから言った。

「何言ってるの。相変わらずヒコベエは単純だねえ。お前の名を書かなかったのが一人だけいたけど、それがヒコベエだということを知っているのはお前だけだよ」

ヒコベエはなるほどと思った。役所から帰った父に母の話をした。父は面白がって言った。

「お母さんにしてはいい所に気付いたなあ。でもね、五十と四十九は全然違うんだよ。四十九人の場合は確かにお母さんの言う通りだが、満票だと確実にヒコベエが自分に投票したことが分かってしまう。だからこの一票の差は大きいんだよ。ヒコベエの感じた通り、黒と灰色は全然違うんだよ」

ヒコベエは、学級委員長になったことが心の底からうれしくなった。

(藤原正彦「ヒコベエ」より)

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 傍線部1「やりたくなかったのに選ばれちゃったから仕方なくやっただけさ」とあるが、この発言から「お兄ちゃん」のどのような気持ちかわかるか。三十字以内で答えなさい。

問三 傍線部2「困っているのはねえ」とあるが、学級委員になることは決定的なのに、ヒコベエが困っているのはなぜか。それを説明した次の（ ）にあてはまる言葉を文中から十二字で抜き出して答えなさい。

学級委員になりたいという気持ちを（ ）なかったから。

問四 傍線部3「名より実をとる母と、実より名をとる父」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 「母」はあくまでもヒコベエの気持ちを尊重すべきだと考え、「父」は級友たちへのヒコベエの威厳を保つべきだと考えている。

イ 「母」は自分に投票し得票を増やすべきだと考え、「父」は自分の欲望を知られることの羞恥を避けるべきだと考えている。

ウ 「母」は自分に投票したことを黙っていればよいと考え、「父」は学級委員になるのは確実だから、自分には投票すべきではないと考えている。

エ 「母」は自分に投票しないで堂々と学級委員に選ばれるべきだと考え、「父」は自分に投票して得票数を増やすべきだと考えている。

問五 傍線部5「この時ほど安堵したことはなかった」とあるが、ヒコベエがとても安堵したのはなぜか。四十五字以内で答えなさい。

〈 問題終了 〉